農繁期が終ると、すぐ藁仕事でした。一年間に使う藁工品を全部作らせるのです。主人は一日の仕事の量をきめてあるのです。米俵十二俵編むのが一日の割当でした。普通八俵ぐらいしか編めないので、夜中に藁をシナゴリ、朝暗い内から始めないと、とても編むことができません。俵編みが終ると縄なりです。一日五十シロ(約七五メートル)一把にして十把の割当だ。縄は十五マロで終り、今後は大ノマ四枚でした。主人が物指して六尺の長さをはかり、一寸でも短かいと真夜中になっても必らずやりとげさせるのです。その他マゴジ二十組、テケシ一足、モトチレ(馬の鞍につける縄)、七シロを四本、草鞋(わらじ)二十足、ツルベ縄一本、これが各一日の藁仕事の割当量でした。モトチレは、どうしても一日に三本しか編めない、同僚が遊びに迎えに来ても行けず、夕食後再び独りでベソをかき乍らニラで藁仕事をしたものでした。私の指を見て下さい。カニの足のように関節から曲っているのは、藁仕事で曲ってしまったのです。

『借　子』

斉藤伝太さん体験記録

私は、小学校を卒業して、すぐ父親と一緒に山へ炭焼きに出ました。当時炭一俵の値段は、二貫俵で十銭でした。これではいくら炭を焼いても生活してゆけず、店屋から前借金をし、漸く暮していたので、毎日山からの帰りに炭を背負ってきては店屋に運びました。だから私たちは何一つ買って貰うことができなかった。

ワラジをはいて毎日山を登るので、足指はすれて皮がむけ、痛くて歩けないのです。せめて地下袋がほしいと夢にまで見ました。

こんな私を見て父親は、「炭二俵やるから、地下足袋を買え。ただ

卸屋の店に見つからぬように金木から買ってこい」といってくれた。

私は翌日木炭二俵を背負って山を下ると、喜良市を通って金木の店屋に行った。

だが地下足袋は二十八銭で八銭足りないから駄目だ、と断わられた。翌日の夕方又二俵背負って金木の店に行き、ついに地下足袋を手に入れた。私は余りの嬉しさに十二銭の釣り銭で酒三合（十銭）を父のために買った。

昭和二年春、十六才になって米四俵で借子に出された。農繁期以外でも仕事はきつかった。一日の仕事は縄五十シロで十肥、またはツナゲ千本。米俵八俵、サンベシ百枚と各々きまっていた。

春の田打ちは鍬で一反歩打つことだ。朝は二時及至三時に起床した。また借子は雇主の家に一緒に寝ることはできなかったし、食事も同じではなかった。借子の寝床は、借子同志が二、三人集まって物置のマゲか、トロジの上であった。電気も火の気もないところにセンベイ布団を敷き、十三ネゴにくるまって寝たものである。

借子には、休日はなかった。正月の一日と十六日、旧盆十四日、一年間にこの三日間限りである。しかもこの休日も実家に遊びに行っても、午後三時頃には夜仕事があるので帰らればならないのです。

旧盆でした。私はその日も夜明前、秣刈（まくさがり）に家を出ました。盆踊りが終ったらしく、村人がぞろぞろ家に帰るのと、出会いました。藻川の原野で二時間位で朝草一〇マロ刈って、馬につけて帰る途中、鳴戸橋附近で藻川のヤツ廻りに見つけられてしまったのです。（註＝ヤツ廻りとは秣刈場の監視人のこと）

ヤツ廻りは「秣全部と鎌一丁よこせ、[illegible]ゆかねば殺すぞ」とおどすので（実際に殺された人もあった）私は恐しくて草と鎌を置いて家に逃げ帰りました。

主人は「鎌の一丁ぐらいなんだ」と云ってすぐ鎌を買わせ、もう一度刈りに行けと命じだ。ヂサマは「朝におそいからだ。もっと早く起きで刈りに行け、見つけられたら走って逃げろ」と叱った。

私は朝飯も食わず今後は飯詰のヤツベ屋敷に、秣刈に行ったが、腹がへって歩けず、あんまり腹がたって、馬の背に積んだ草の上に乗って馬を殴りつけて帰ったところ、これまた、ヂサマに見つけられてしまった。

ヂサマは「馬、疲れで死んでしまうね。馬さ乗るもんでねえ」と大きな声で叱った。

馬よりも粗末にされる借子の自分がみじめで、そのままマゲにのぼり、家に帰りたくて、思わずオンオンと泣いた。

『雇い』

成田永作さん体験記録

中柏木の成田永作さんが「雇い」（出稼ぎ）に出たのは、昭和七年、二十八才のときだった。期間は六月六日から二百十日（九月一日）までの三ケ月間で、前渡金として六十円支払われた。当時、米一俵の値段は約七円、清酒一升二円であったから収入はよい方だった。

行先は、ロシア領カムチャッカの西海岸ケ[illegible]タンという罐詰工場の雑夫であった。

六月一日、六百五十人の漁夫や雑夫を乗せた三井の貨物船は、函館を出港した。

船の中は、青森・秋田・岩手からの百姓が多く、「この船に乗ったら地獄行きだ」とか「朝暗いうちから田畑に出て、稼せいでも食えねえ」などと話していた。

稚内近くになって小雨がパラつき、やがて大粒になると、うねりも大きくなった。

オホーツク海に入ると、海の色はこい灰色で、着物の上から刃物のように寒さが刺しこんできた。細かい雪がピュウピュウ吹きまくり、甲板を洗った波が去った後は、すぐ凍って滑った。一面海霧（ガス）に覆われ僚船も島も何も見えない。船は間隔をおいて汽笛を鳴らすが、忽ち船にぶっつかる波浪や風に消され、反響音は全くなかった。うねりは氷山のようにモリモリとむくれ上って船を持ちあげる、スクリュウが空廻りして、ガーガーと鳴る、エレベーターが下りるようなあの不快さで谷間に落ちる。恐しさに、臭い船底でゲエゲエ吐き、死の恐怖に震えていた。

ケフタン到着は六日夜の八時であった。やっと船底から這上り解放されるヤレヤレと思って上陸するや、整列させられカニや鮭を獲る漁夫と缶詰を作る雑夫の二組にわけられた。

太い竹の棒を持った監督が現われ、「これから、工場と宿舎に荷上げしろ」と命令する、船と陸にかけられたアユミは海面から三メートルもあった。ゆれ動くアユミの上を米俵をかついで渡るのが恐かった。海流が烈しく、海に落ちて水[illegible]に顔が出る頃には七十米も流れており救助はできないと聞かされた。

百米程の処に缶詰工場があった。四月に来ると、工場や小屋は雪の中にすっぽり埋もれ、寒気も厳しくパイプなどが破裂するということだった。五月になっても地表は氷っていると云う。この荷上げ作業に三日かかった。それも午前五時頃から、夜は六時頃までであった。そして食事の時間は全くないのである。船から荷物を工場に運び、引返し途中握飯が一コづつ、渡される。それをかじりながら、船に戻るとすぐ肩に米俵が乗せられる。少し遅くなるとすぐ監督の罵声が飛ぶ。「ホイド（乞食）みたいに、ガツガツ飯ばれまぐらて、ダラダラすんな。」

鮭缶詰は、長いベルトコンペアに乗って流れてくる。その中味の量を調べ、入れたり取ったりする作業が雑夫の仕事であった。

一台のコンペアに、四十人づつ並んで立つ。こんな仕事なら借子よりはよっぽど仕事は楽だと当初は思った。

しかし、「雇い売り」はそんな気楽稼業ではなかった。カムチャッカの夜は短かく、日の出は午前三時、日没は午後十一時であった。

起床は午前三時、監督が竹の棒で柱を叩き「起きろ」と叫ぶ。日光はすでに東の白樺山にあった。ボイラーの気笛が作業開始を知らせる。

朝食は午前五時、二〇分位の時間である。毎日臭い塩引と干大根の漬物であった。

食事も仕事始めも、ボイラーは一分の無駄も許さず、昼食は十二時から一時迄、この間に洗濯などをする。晩食は午後五時で三十分間の休みである。そして夜の作業がまた続く、作業終了は午後十一時、そ

れから入浴してねる。立ちっ放して実働十八時間、忙しいときには二十～二十一時間の労働時間となり、眠る時間は毎日、二～三時間であった。

よく工場で立ち放つしで、夢を見ていることもたびたびあった。食堂も売店もなく、飯炊き女もいない、家族との交通も新聞もテレビもラジオもない、全く社会から離隔された監獄部屋であった。家庭に不幸が起ろうが知る由もないし、帰宅することすら出来ない、働らき蟻のようにただ黙々と働くのだった。

三ケ月間は、休日とて一日もなく洗濯する時間さえなく、着のみ着のままであった。

一ケ月に一度か二度、サシ網で獲った鮭を積んで船が帰って来る。その船を陸揚げするとき「オスコイ、オスコイ」と号令に合わせて網を引く、この時はボタ餅三コづゝ配給された。

又、缶詰が一万個（一箱四十八ケ入）出来上ると、茶碗に酒一杯づゝ配給される。雑夫たちは小躍りする、楽しみはこのときだけである。

人間として労働の極限であろう、全く人格的にも認められず、囚人にも劣る残虐な条件で労働を強制されるのが「雇い」である。

三ケ月の期間が満了となり、船が函館に着くと、「雇い売り」は終るのだが、函館の山々、街が見えると、ボロボロ涙が流れた。

漸やく監獄から解放され、娑婆に出される嬉しさの余り……

ここで家までの旅費二十円支給されたが、酒を飲んだり、女を買ったりして帰る汽車賃を足らなくする若者もいた。

成田さんは三ツになる愛娘のために大きな人形を買った。

嘉瀬の駅に下車、小脇に人形箱を抱え[redacted]路づたいに中柏木に走った。

だが、愛娘は一ケ月程前、急性肺炎ですでにこの世を去っていたのである。それも知らずに……

成田さんはそれっきり「雇い」をやめた。

成田さんの脳裡には、当時のロシア軍の番兵、工場の廻りを馳けるキツネ、白樺が、走馬燈の如く馳け巡っているように感じられた。

『タコ部屋』

秋元金五郎さん語る

「おめだの馬っこ、駅の近くにいだ」

喜良市の近藤のオドが知らせをうけたのは、日暮れであった。

馬は橇をつけたまま、全身雪だるまになって、嘉瀬駅近くの電柱に繋がれていた。

「あの馬鹿ワラシ」「糞野朗っ」オドは何度も舌打ちしながら、馬の雪を払いのけた。

長男の強一は二十になるが、常日頃百姓は嫌いだど愚痴をこぼしていた。夜明け前、土蔵から米六俵盗み、馬橇で嘉瀬に運んで売り、その金を持ったまゝ東京方面に家出したのである。

その後、強一から一年余り何の音沙汰もなかったが、先日、ひょっこり手紙が届いた。

差出先は樺太の大泊町で佐々木組飯場となっていた。「音信不通で

心配をかけているが、元気で働らいている。[illegible]になる仕事場なのでもう少し頑張って、どっさり金を持って帰るから安心してくれ。今年は徴兵検査だが、このまま樺太にいたいし、検査もこちらで受けたいから、居留証明書を送ってくれ」こんな内容の手紙である。

しかし、よく見ると封筒は強一が書いた字であるが、手紙は代筆であった。強一の字に真似て書いてはいるが、強一の字ではなかった。強一の手紙が誰かに調べられ、書き直されているのだ。オドの脳裏を不吉な予感が走った。もしや「たこ部屋」にでも入っているのではないか、と。

この年も嘉瀬から秋元金五郎ら三人が、樺太の落合町に「雇い」に行くことになっていた。落合といっても、町から私設の樺太鉄道で東沿えに十里程北上し、腰までぬかる雪の中での「木樵り」であった。

この話を聞いて、オドは「強一のところに寄って、連れて来てくれ」と秋元らに哀願した。落合には大泊から始発の汽車が出るので、秋元らは大泊に一泊し、近藤を捜すことにした。

旅舘の主人は「あの佐々木組飯場はタコ部屋だといわれている。中々連れ出せないだろう」と話してくれた。

やっぱり強一はタコ部屋に入れられていたのだ。飯場は町外れの淋しい処にあって、屋根の低い豚小屋同然の建物であった。

「なにっ、近藤？　そんな奴はいないよ」ちょび髭をはやした小男が、窓から顔を出し、あざけるように云って、ぴしゃりとしめた。

丁度そのとき、四、五年生の男の子が物珍らしげに走って来た。「人夫の中に近藤という人がいるか名札を見て来てくれ、こっそりだよ、小遣いあげる」　十銭やると彼は人夫が働いている方に走って行ってすぐ帰って来た。「おじさん[illegible]藤はいるよ」と云った。

秋元らは作業が終るまで待って、近藤を連れて帰ろうと思った。作業が終ると人夫達は一列に並んだ、「番号」点呼である。

やっぱり近藤はいた。

秋元らは「近藤を連れて帰りたい」と組頭に頼んだが、「うん」とも「すん」とも云わなかった。秋元らは仕方なく警察署に馳け込んだ。このままにしておくと近藤が、どうなるかわからなかった。

「母親が心配して寝込んでいる。今年は徴兵検査だし、怪我でもすると困るので、内地に連れて帰りたい」と。

腰の重かった警察も漸やく飯場に行ってくれることになった。

警察を見ると、組頭は別人のように腰が低かった。「近藤には、二百五十円の前借がある。それを載ければ、帰してもよい」ということになった。

「我々はこれから、雇いに行く。帰るときに支払する」と云う条件で警察が中に入り、近藤を連れだすことができた。

近藤は、裸のままだった、何一つもっていなかった。

「囚人にも劣る残虐な条件で労働を強制し、その果てに借金とは」近藤は絶句した。

飯場から渡された伝票を見ると、東京で周施屋から雇入れたとき百円前借金している。樺太まで到着するまでの汽車賃、船賃、宿賃、飯代、周施料の合計が百十円で、飯場に着く前、すでに十円借金していたのである。

飯場では、日用品が市価の二倍であった。幹部連中が、搾取しているのだ、市価で二円五十銭の地下足袋が五円だ、新しい地下足袋を買

ったら幹部の子分が来て「おい、近藤、俺のヤツと交換しろ、その代りお前を楽な仕事の方に廻してやる」と云う、いうことをきかないと暴力である。彼の破れた地下足袋と交換し、結局二足買わされる。仕事を休むと一日便所の中に閉じ込め、飯を食わせない。怠けると、罰金、態度が悪いと云っては、棒切れで殴る、けるの暴力である。逃亡しようものなら、半殺しを覚悟しなければならない。

毎日、腐った塩引きに沢庵で、働らけば働らく程、借金が雪だるまのようにふえてゆき、飯場から抜けられなくなるのだ。

タコツボに入った蛸が、抜けられなくなるように……。

『むすび』

明治維新から第二次世界大戦後の農地改革に至るまで、農民の子弟はやはり農奴として、解放されなかった。

封建時代の領主は、農奴を自分の財産のように思っていた。売買しなかったのでヨーロッパの奴隷より緩和された収奪、支配のもとに置かれたように思われるが、実際の農奴は、幾階層にも重畳的に支配され、独立生産し自立することは困難であった。

戦前の日本農業の特色は、地主制と極端な零細農経営がその基本型として存在したことであり、日本の資本主義はこの地主制と零細経営をその不可欠の構成部分として形成発展したといわれる。

小学校五、六年になれば、口へらしと、年に米二斗の収入を得るため借子に出され、大人同様の労働、年間無休、粗食という残酷な仕打に耐え乍ら、日本の食糧を支えてきたのである。

農奴には丸一日の休暇もない。何時も[illegible]の視線を浴び乍ら、ビクビクした気持でいる。

例え休暇を与いられても家の中に黙っていることができない。「何だか悪いことでもしたような思い」とか「お天とうさまに申訳けない」そんな気がして、畑や田圃に出かける。

こうした奴隷根性が未だ古老達の心のどこかに隠されているような気がする。

又、戦時中における強権発動、叩き完納など権力によっての弾圧など、こうした血のでるような苦しみの中に、今日の農業が培い育くまれてきたことを、尊い経験として私たちは忘れさることはできない。

そして今、農政は再び谷間にあることも……

メモ帳⑤＝津軽と北海道

『海流』

昭和四十七年三月気象庁が青森秋田県境の沖で百二十マイル間隔で、五隻の船から千六百本のビンを日本海の海流に投げた。秋までに拾われたビンは百五十本で、松前で六十九本下北半島の奥陸湾口で二十九本、北海道上の国・汐首で十六本、竜飛崎で五本、津軽海峡から太平洋に出て北上したのが五本、太平洋を南下したのが一本だったという。

日本海の親潮に乗って、中世京都から松前まで通常一週間で着けたという。深浦、鰺ケ沢、小泊は、松前・江差通いの北前船の船だまりの港で、十三港は北海道との物資の交易港でもあった。

古文書①

（鳴海勲氏所蔵）

伊勢参宮寺請證文

寺請證文之事

一、奥州津軽金木組嘉瀬村善右衛門
与申者　代々禅宗に而当時に相違無御座候
此度伊勢参宮心懸他国仕候　諸国
御関所御通可被下候　若此者病気
又は病死差合等御座候わば　其御領分
御作法の通　御取片付可被下候　為念
寺請証文依而如件

文政二巳年四月　　津軽金木村
　　雲祥寺　印

所国所々
御関所
御番衆中

文政二年（西暦1819年）今から164年前、鳴海勲氏の祖先、何代目かの善右衛門さんが、伊勢参宮旅立ちの上方見物紀行に必要な身分証明書、道中手形として、雲祥寺が証明書として書いた古文書で、この古文書証文で、現在戸籍、身分の証明は所轄の市町村で発行しているが、藩政時代の檀家寺は行政的な権力も持たされていることが、この古文書で知ることができる。

柿本人麻呂の伝記（前編）

外崎三千男

私に対する『かたりべ』編集長の指示命題は「柿本人麻呂の伝記」という大変な論述である。

柿本の人麻呂の「神石」は明治時代のはじめに、嘉瀬部落時代の素封家「山中竜助」に依って十三潟の汀より運搬、嘉瀬地内清久溜池の出崎の一角に奉祠され、それが二転三転を経て、現在の「嘉瀬八幡宮」境内に遷座奉祠となったことは、嘉瀬部落民の誰もが知悉しているとおりである。

それで、御神体本尊の「人麻呂」とは如何なる人物か、又、どういう有為転変の人生を送ったかを研究・解明することは、独り「嘉瀬探郷会」だけでなく部落民全員にとって、誠に必要・喫緊の事由と思うに付き、編集長の指示命題に従って、奮って筆執った次第である。

八幡宮鎮座の人丸神石

一、人麻呂の神格性（神社・祠廟）

「人麻呂」の名を「人麿」とも書くが「麿」は「麻呂」の合字で国字（日本製）の文字であり人名の下に付けられる文字である。蘇我氏に「麿」の付く名が多く、倉麿・石川麿・安麿などが見えてある。「丸」は「麻呂」の転で人名の下に付き、「牛若丸」（源義経の幼名）「日吉丸」（豊臣秀吉の幼名）であることは知らぬ人はないでしょう。

さて、その「人麿」が「人丸」とも書かれるようになってから、その語呂がいろいろなことの連想を呼んで神格性に発展しているのである。

即ち先ず、早大教授永井一孝氏は民間信仰の一つとして

⑴火防の神として祭られている所が多いという。人丸――ヒ・トマル――「火止まる」となって火難除けの御利益をもたらすという意味に取られるので、今でも厚い信仰を受けているという。或時明石の里に火難が起きた時、常に明石神社の御神を信仰していた人の家に火炎が延びて来て焼け始めたのを、此の家の主人が至心になって

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく舟を見つるかな

般若防にてやがて火止まる

と即興の歌を詠むと、御託宣誠にあらたかにして火は忽ちに消えてしまったという。これを見た人々は明石の御神の御利証をまのあたり見て、厚い信仰は今でも絶えない許りでなく、此の里には爾後火難は皆無だという。

(2)安産の神としても祭られているということである。人丸――ヒト(ウ)――人生まるとの連想から安産の守り神としての信仰の許に国内方々に祠廟があるという。

次は京都市立大学学長の梅原猛氏の説であるが、

(3)眼病の神としての信仰を持たれていること。人丸神社の多くは示現神社と言われるが、(示現とは仏や菩薩が衆生を救済するために、種々な姿となって現れることの意)この示現が慈眼と同音で、観音経の「慈眼を以って衆生を見る」という言葉の連想から、観音信仰とつながり、人丸は観音の化身であるとの信仰から、眼病には御利益があることとなったのだという。その例として、明石にある人丸の神社に筑紫から盲人が詣で、

ほのぼのと誠明石の神ならば
我にも見せよ人丸の塚

と詠んだら、両眼忽ちに開き、撞いて来た桜木造りの杖を境内の片隅に挿して帰り来った所、その杖に使っていた柿の木を挿し込むと、忽ち芽が出て花まで咲かせたという話まであるという。誠に眼病としての御利証の明らかな話である。

(4)水難の神としての信仰を得る至ったことには三つの縁喜を持っているのである。

(イ)人丸の短歌中、最も傑作だとして人口に膾炙しているのは古今和歌集第九巻劈頭の羇旅の歌の項目に

409 ほのぼのと明石の浦の朝霧に
鳥がくれゆく船をしぞ思ふ

というのがある。歌の意味は「明け方のホノボノとした頃合に、いつもは各にし負う明石の海の難所だが、今日ばかりは瀬戸も風波は無く、朝霧の中を島影に隠れたり見えたりして航行する船の姿はしみじみと情景深く思われる」の意味から海難安全の加護として、仁和年間、58代光孝天皇(在位八八四―八八七)の御守に創建されたと伝えられている。その後の或る年に此の明石の里に火難が起こった。

(ロ)もう一つは神社でないが、人麿が寃罪ながら石見の国に流刑となり、最後は水牢に入れられて死んだが、その獄中で次の辞世の歌を詠んでいる。

荒波に寄り来る玉を枕に置き
われここにありと誰が告げなむ

又、人麻呂が水牢の刑に処せられているのを知っている人麻呂の第三の妻の依羅郎女は次のような悲痛哀切極まる思いの歌を呼んでいる。

今日今日とわが待つ君は石川の
貝に交りてありと言はずやも

岩見地方の人に限らず、今では全国の人丸信仰の船乗りや漁業者は海上の荒れ狂いに際して、逸早く危険を慮って、右の歌のどれか、或いは二首を誦することに依って、必ず人麻呂の加護を受けて無事を得るという。人麻呂海上安穏の霊験以って知るべしである。

(5)歌道の神としての人丸

明石の浦に創建された明石神社は海難除厄の守護神として信仰厚い

ことは前述したが、その碑に彫り刻された前述の歌の優れた出来栄えから、人丸の代表作となっているので、歌道に志す者は、古代から今世に至るまで参詣者は絶えず、皆人麻呂の絶妙な歌作の精神に触れ、そのあらたかな霊験に接しようとの念願に外ならないのであろう。そのほか万葉集や柿本人麻呂歌集に載っている長歌・短歌・その他の作品の比類を絶した出来工合から、山上憶良・山部赤人・大伴家持を含めて、万葉の四大家の筆頭に数えられ、特に人麻呂と赤人の二人は歌聖と尊称され、後の古今和歌集の筆頭撰者、紀貫之と又その後代の新古今和歌集の撰者の藤原定家とを古往今来我が国歌学史の四聖と仰慕されるに至ったが、勿論人麻呂はその第一人者的存在であることに異論はない所であろう。

人麻呂作の歌数は万葉集に長歌一七首、短歌六八首で、他に柿本人麻呂歌集に三七二首で計四五七首に及ぶという。それぞれの歌によって雄渾壮大、至誠の情に充ち溢れたもの、死人に対する悲しみを歌っては壮絶、哀切の無限の感を起させ、[illegible]を過ぎる時の哀別絶唱する歌など他の何人にも比肩を許さざる全くの独擅場の感に満ち溢れている。どの歌も、どの場面を想像しても、他の及ぶ所でなく、正に歌聖たる面目躍如たるものがあり、和歌の大宗としての雙びなき存在を知悉すべきであろう。

(6)人丸を祭る神社　全国に七十社

上に縷々述べ来たったように、人丸は種々の霊験を現わし、安産・火防・海上安全・眼病快癒等のほか歌学の神としてまで種々の方面から厚い信仰を受けているので、高崎正風（鹿児島県出身。八田知紀に師事して作歌を学び、歌風の温雅並びなきを以て鳴り、宮中入りして明治天皇の歌道の太傅となる。後、宮中の御歌所の所長となり、男爵を授けられ、宮中顧問官となった）の調査に依ると日本全国に人丸神社が七十社もあるというそうだから、七十の数も大体としても、我が嘉瀬八幡宮境内に安置奉祠の「人丸の神石」も新たに加えられる資格ありとすれば、七十社を越える勘定になる。斯ら数え立てれば、町村合併に依る、画期的行政区制改正以前の旧町村には必ず創設された応神天皇を唯一神としての八幡宮は別格としても、稲荷様や天満宮の数に雁行する社数を占めるまでに至っていることを思うにつけても、罪科も無いのに遠い辺境に死罪の極刑に処せられた人麻呂としては、その怨霊も十分に鎮魂・昇天出来たであろう。

二、人麻呂の先祖・及び本籍地

(1)先祖　古事記を繙いて歴代天皇の系図を調べると、第五代の孝昭天皇の末裔であることがわかる。孝昭天皇には兄の天押帯日子命（アメノオシタラシヒコノミコト）と、弟の大倭押帯日子国押人命（オホヤマトオシタラシヒコクニオシビトノミコト）の二柱がお生まれになり、弟の御子が帝位

即き第六代孝天皇となり、兄の御子は、春日の臣や柿本の臣、その他多数の国造の祖先となったという。依って柿本氏は皇胤を先祖とする名族の家系である。

又第六代孝安天皇の皇女押媛命が柿本姓を名乗ったのでそれが人麻呂の先祖となったともいわれ、どちらが柿本氏の区系か今尚判然どしないが皇胤を襲いでいる名族であったことは確かである。

三、柿本人麻呂の本籍地

人麿は何処で生まれたか、少くとも幼少時何処で育ったか、本籍地は何処かということも記録に無いので確かなことは今でも全く不明であるという。究明しても不可能であり、想像するより途はないという。それで生活、活躍の長期に亘る地域を調べると、大体三つに分けられる。

(イ)大和説　これは姓氏録に敏達天皇の頃に柿本氏のあったこと、天武十年に柿木臣猨（人麿の侮辱名）の記事などから、岡田正美（人麿研究の大権威者）は人麿の壮年の頃、大和国内を吟遊詩人として詠んだ長歌。短歌が最も多くあることから大和説が最も有力であるといっているのである。

(ロ)近江説　38代天智天皇の六年、都を近江の大津（滋賀の宮）に奠めた時、父の柿本氏も下級官吏として赴任に際、人麻呂（三歳）も母と共に移住したという。天智帝が六年間治政に当たって死んだが、治政が短かかったので、年も幼少であったので、歌作の数も少ない。後年、滋賀の都を巡遊の際、数種の歌作と名歌を残しているが、本籍地と見るには年数の六年間では本郷とするには当たらないという。天智帝の六年の近江の治政の後、皇子39代弘文天皇が帝位に即いたが、即位の年、天智天皇の弟、大海人皇子との間に皇位継承の争いが出来それが有史以来の大乱、天下分目の壬申の乱が起き、大海人皇子の軍が勝ち、大海人皇子は40代天武天皇となった。人麻呂は天武方に付いたので、天武時代は勿論のこと、次の女帝41代持統天皇（天智天皇の第二皇女で39代弘文天皇の姉に当たる）の二代に仕え、天皇・皇子の行幸、行啓に供奉して作歌を奉り、又皇子の死に際しての殯宮に痛恨の歌作を奉り、歌作の全盛時代は天武・持統の二朝の頃であった。依って大和地方が人麻呂の本郷たるを実証することになった。

(ハ)石見説　石見を本郷とする説は、石見の国、美濃部戸田郷小野という所に祠がある。此処に語部という語家があって、此処に人麻呂が生まれ、成人するに及んで出京し、下級官吏として宮仕えし、和歌の名手から次第に出世して、天皇・皇后・皇子の行幸、行啓に際し、供奉の傍、歌を詠進し、取立てられて、春宮大夫までなったが、一時石見国府の地方官ともなって任官中、皇位継承問題で上京し、前春宮大夫（春宮職には平年六百人の多人数を擁しているという）の立場で大津皇子を支持し、対立候補は持統天皇の一粒種草壁皇子であったが、天武天皇は大津皇子に傾いていた所、決定を下さない中に病気で他界となったので、持統は透かさず即位し、無限大の権力を以て、大津皇子を冤罪なのに叛意ありとて大軍を向けて急襲し、大津皇子を自殺に追い込み、草壁皇子を皇太子に擁立してしまった。人麿を反対派の頭目と看做し、国の果てと見られる石見の国に流刑してしまった。人麻呂は八年間石見の各地の牢を転々と引き廻され、最後は中国第一の大河「江の川」の川口に造られた水牢に入れられて処刑されたという。

石見の国と人麻呂とは生誕地としても幼少時の在郷と国府勤めの二年位と流謫八年間を合計しても十五、六年間に過ぎない所を見ると、人麻呂は四十六、七才で死に、多く見ても五十才未満で死んだとすれば大和には二十四、五年、石見には幼少時代、国府勤務時代、流刑時代を合せて二十二、三年、近江国は八年と見れば、大和国が最も長く在住し、その業績も国文学史上、最高の金字塔を樹てたことは何人も疑いを挿む所がないであろう。

四、柿本人麻呂の妻

人麻呂の妻は万葉の歌から推して二人、三人、四人、五人だといろいろ説がある。いずれも万葉の歌から推しての説である。

(イ)羽易娘子――幼児を残して先に死に別れた人麻呂の第一妻だという。

(ロ)岩見娘子――人麻呂が任地石見国から妻と別と別れて上り来る時詠んだのは、長歌が三首、反歌が六首で万葉集巻にも載っているが、この妻に関して人麻呂の最も人口に膾炙しているものを挙げれば

巻二〇石見のや高角山の木の間より
　我が振る袖を妹見つらむか
○ささの葉はみ山もさやに乱れども
　我は妹思ふ別れ来ぬれば
○石見なる高角山の木の間ゆも
　わが袖振るを妹見けむかも

(ハ)衣羅娘子――第三の妻

この人は人麻呂が石見の国に流刑になった時、生国は石見であることと、元岩見の国府の役人もした上、歌道にかけては天下第一人者であることから、監視も余り厳重でもないので流刑場への歌を学ぶ人の出入りは大目に見られていた。それでその地方の豪族の娘、依羅郎女も弟子入りしてから二世を契る間柄となるようになった。後、人麻呂が流謫の各地を引廻されているうちに、最後の処刑の地、江津の水牢に入れられるや、流石の人麻呂も処刑近きを知り、次の辞世の歌をものした。

○荒波に寄りくる玉を枕に置き
　われここに在りと誰か告げなむ

この歌を人づてに聞いた第三の妻は

○今日今日とわが待つ君は石川の
　貝に交りてありと言はずやも

救いようのない我が夫の辞世の歌を聞いて、妻、依羅郎女は実に断腸の思いに襲われたことであろう。この依羅郎女については「かたりべ」第一集に「以呂波歌と柿本人麻呂」という命題で述べたから、これ以上は割合することにする。

※　柿本人麻呂の年齢順の事蹟。「かたりべ」次号に人麻呂の伝記の後編が続く。

◎研究・調査の参考書を左に列記する。

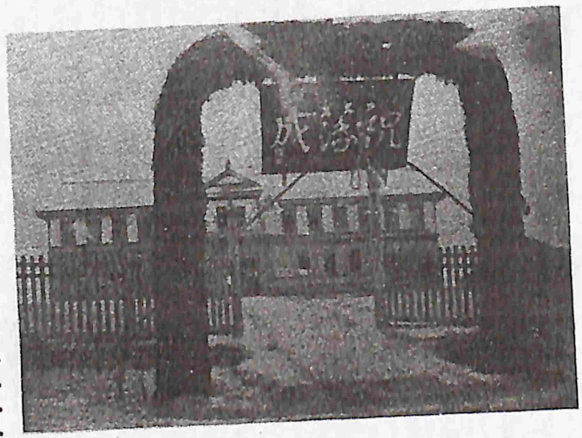
1. 国文学総説（早大教授永井一孝著）（自己所有）
2. 古事記（全巻、福永武彦訳）（自己所有）
3. 日本書記（人皇の部、福永武彦訳）（自己所有）
4. 万葉集（土屋文明訳）（自己所有）

5. 古今和歌集（窪田空穂訳）（自己所有）
6. 古今和歌集（紀　貫之論説の仮名序）（自己所有）
7. 柿本人麻呂（斎藤茂吉著）（県立図書館所蔵）
8. 水底の歌（京都府立芸大学長梅原猛著）（自己所有）
9. 柿本人麻呂論（小冊）（斎藤茂吉著）（五市図書館所蔵）
10. 栄光の女帝持統天皇（円地文子著）（自己所有）
11. 壬申の乱（岩波文庫）（自己所有）

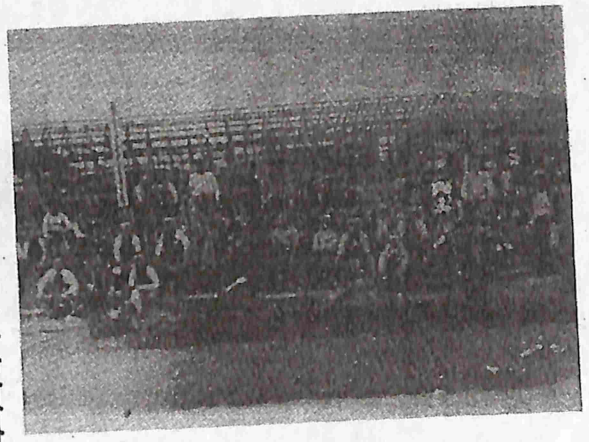
以上

（写真提供　工藤　蘭氏）

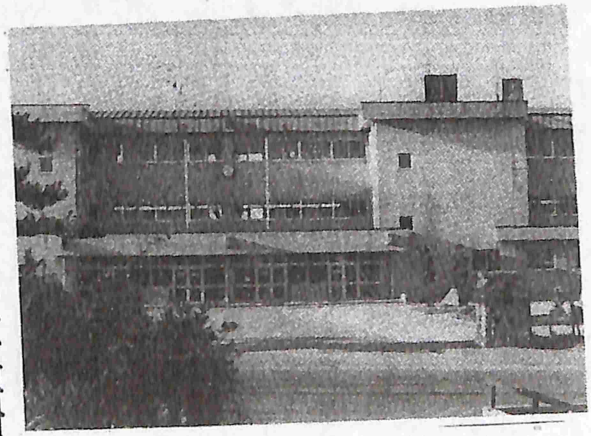
嘉瀬小学校



①明治二十年二月、嘉瀬小学校新築案、村議会で決議、明治二十一年九月一日（現沢田茂氏宅地内）新嘉瀬小学校飯塚宇吉宅より移転、竣工記念写真＝初代猪股竜太郎校長時代。



②大正十三年十一月、字端山崎二六八番地校舎地に移転新築した当時の校舎棟上記念写真＝花田組（現花田製材所）新築請負、鳴海民之助校長時代。



③嘉瀬小学校校舎。昭和四十八年五月六日鉄筋コンクリート建ての校舎完成＝佐々木広志校長時代。